

カオリは主婦仲間のサワコを自宅に呼んで、女子トークを楽しんでいた。二人とも三十代前半で、子供なし。旦那の稼ぎで食っているお気楽主婦だった。

「コーヒーもう一杯飲む」

カオリは言った。

「うん、お願い」

二人はすでにチーズケーキを平らげていて、お皿に盛ったクッキーも半分ほどに減っていた。

カオリとサワコは本当に気が合って、特に恋愛話や下ネタが好きで、その話題が多かった。けっこうエグい話まで平気でする下ネタ大好き主婦なのだ。

「さわちゃん結婚何年目だっけ？」

「うちは三年かな」

キッチンでコーヒーを淹れながらカオリが話しかけた。

「それでまだ子供できないの？」

「やることやってるんだけどね、こればかりはなかなかね」

「そっかあ。授かりものだもんね。できない人はなかなか出来ないみたいだね。うちもそうだけど」

「そうみたいね」

「週に何回ぐらいしてんの？」

「多いときで三回かな。一回のときもある。回数が足りないのかな。でも、マンネリ化しちゃってね。いまいちその気になれないのよ」

「ああわかるう。うちもそうなりつつあるもん」

「カオリさんは何年目？」

「うちは二年目」

「え？ 二年でもう倦怠期？ 早くない？」

「そうだよ。でもそれは人それぞれだから」

「そっちは週何回？」

「多いときは三回から四回やってたけど、最近はレス気味ね。私もあんまりその気ないんだけど、旦那が求めてくるときあるから……」

「穴だけ貸すって感じ？」

「まあ、そんなとこ。夫婦だからしょうがないかなあと思ってやらせてる」

「へえ、演技してるんだ」

「そうね。旦那はそれに気づいてないみたいだけど」

カオリが新しく淹れたコーヒーをテーブルに置くと、二人はそれをすすった。二人とも夫婦生活はあるものの、すでにパートナーとのセックスには飽き飽きしていた。

「さわちゃんとはエッチに時間かける？」

カオリの質問にサワコは首を横に振った。

「ちょちょこっと前戯して、すぐに挿入って感じ」

「ああ、それじゃあね」

「そうなのよ。自分だけイって終わりって感じなのよ。もうちょっと、こっちも気持ちよくなりたいな一みたいだね」

カオリはそれを聞いて笑った。

「欲求不満なんだ」

「それ。正解」

サワコはカオリを指さして言った。そのあとサワコは言ったのだ。「なんかいいことないかなあ」と。

それを聞いたカオリは身を乗り出した。

「私ね、最近、男の娘と付き合ってるの」

「え！ 不倫してるの？」

「まあね」

楽しそうに笑みを含んだ顔でカオリは頷いた。

「オトコノコって年下の子ってこと？」

「うーん、年下は年下だけど、そういうんじゃないってね」

「どういうこと？」

サワコはそっちの世界には疎いようだった。カオリはざっとニューハーフや男の娘についての説明をしてやった。それでもまだサワコは理解しきれていないようだった。

「へえ、なんだか解んないけど、要するにクオリティの高い女装男子ってことね。はいはい、それで？」

「で、その可愛い男の娘と知り合って付き合ってるの？」

「へえ、付き合ってるってエッチもしてるってこと？」

「まあ、それも含めてだけどね」

サワコは笑った。

「含めてって、それが目的なんでしょ？」

「そればかりじゃないわよ。二人でデートしたり、買い物したりしてね。相手も性格が女の子だから話が合って楽しいのよ」

「ふーん。でも結局は男なんだよね。挿入して終わりでしょ」

「まあ、そうだけど……」

カオリは少しイラついた。どう言ったら解ってもらえるのだろうか？ そう思いながらスマホを手にして、その男の娘の写真をサワコに見せてやった。

「これ、どっちが男の娘だかわかる？」

カオリが見せたのは、二人が写っている写真で、一人は本物の女の子で、一人が女装した男の娘だった。

「え？ これ、二人とも女の子だよ」

「違うのよ。一人は私が付き合ってる男の娘なの」